

## 身辺事情と現代の世相について（96・5・13）

西 田 亀久夫（昭12・理甲）

第三の人生のスタートは、古来稀な七十を過ぎて、八十が間近に来ております。一番歳を取ったと実感するのは、歴史小説を読んで、英雄豪傑がみんな自分より若いことに気が付くときです。閣僚の名簿を見ても、我々より年上は余りいない。

昨年の暮に永年の学校生活をやめ、時間割によって動くことがなくなつたとき、さてこれから自分の生活をどうやってコントロール出来るだろうかと心配しました。何か自分に強制するものがなくてはと思ひまして、NHK学園の通信教育に入りました。その一つは「イスラムの世界」という全く知らない世界の勉強です。6ヶ月間に6回レポートを出して、三月に終了証書をもらいました。そして初めて、イスラムの中にも神秘主義もあれば、禅宗のように立て籠って行をする人もいる。人間のやることにはあまり変わりはないと思ひました。自分の感想として、講師に対して質問しましたのは、イスラムがアラアの神だ

けを唯一の神様と信じ、それ以外のものを全部排除して全く妥協しないという宗派である  
とすれば、これからの世界で一体どういう意味を持つのだろうかという疑問でした。いや  
そんなことないと言われたんですが、これからの世界の秩序のあり方について、根本的な  
疑問が残りました。

もう一つは、子供の時から手先を動かすことが好きで、年寄りには特に必要だというの  
で、NHKの木版画の講座に入りました。これは、一年間で六回作品を出すのですが、今  
はまだ半分しかやっていません。これで感じましたことは、彫るのは楽しいのですが、単  
純な絵を三色くらいで刷るといふ作業をやってみて驚きました。江戸時代の広重などの版  
画を思い出し、あの繊細な図柄をあれだけの色で作った江戸時代の技術は、ぞっとするほ  
どすごいものだと感じました。

年が明けてからやったことは、三人の子供が世間にご迷惑をかけない程度に独立してや  
っておりますが、これから年を取ってどちらか一人が残った場合、子供たちに迷惑を掛け  
るのはいやだから、出来るだけ気楽に極楽浄土へ行けるようなデザインを考えて遺言状を  
作ることでした。作った遺言状は極めて単純で、私が死んだら私の名義の財産は全部女房  
にやる、女房が先に死んだら私がもらう。相続権としては、遺贈分という権利があるのだ  
そうですが、死んだ時は一旦お母さんに全部譲れ。お母さんが財産を持っているというこ

とは、子供が親を見る目が違うだろうという訳です。

次に、身辺事情で皆様方に関係がありそうなのは病気の話ですね。今まで私は、大きな病気を四つやりました。最初は胆石を取ったのが今から二十年程前ですから、これは昔話です。その後昭和五十五年に脳外科の手術を受けました。慢性硬膜下血腫です。人間の脳みそをかこつて頭蓋骨の下に膜が三つある。一番外が硬膜、次によく聞く蜘蛛膜、三番目が軟膜ですが、その硬膜の下に血腫が出来て、それが脳を圧迫する。そのため、言葉の発音がかたかしくなり、歩いていて左足に右足がつまづくなど、バランスがとれなくなる。

この病気は余り珍しくないだそうです。頭に衝撃を受け、脳自体は痛まないが、血の固りが脳を圧迫する。今日ではレントゲンとコンピュータとを組み合わせたCTスキャンで断層撮影すると、血腫が溜っている場所がぴたりと分る。早く処置をしないと後遺症が残るそうです。これからは、頭が痛くて水枕をしても駄目、熱さましもきかない、脳波もおかしくない、しかし頭の中が張りつめたように痛いときは、CTスキャンで診断を受けられるとよいでしょう。脳外科の手術というとすごいようですが、入院一週間ですみました。頭はくりくり坊主になりますが、二ヶ所に穴をあけて中の血を吸い出せば痛みもかゆみもなくなる。早く見つけければ怖くない病気です。

もう一つは、今年の二月に前立腺肥大の切除手術をしました。これは膀胱から尿道に出

てくる入口の所に前立腺があつて、これがはれてくると、夜中に三回か四回トイレに起きるようになる。痛くてたまらんものではないのですが、医者は早く取った方がいいといひました。フランスのミッテラン大統領は前立腺ガンで亡くなったのです。有り難いことに、昔と違って開腹手術ではなく、尿道から膀胱へ管を入れて、内視鏡で見ながら削り取るのです。水をじゃんじゃん入れて削りカスを流し出すだけで、全然痛くありません。手術を始めてから終る迄二時間かかりました。正味10日間ぐらゐの入院で終りましたが、後で良かったと思うのは、個室に入ったことです。ホテルなみの費用はかかりますが、泌尿器科の手術は、手術後一週間は膀胱の中へバルンという物を入れて、管を出したまま、水をどんどん入れて中ものを出す。そのため排泄も不規則になる。これを合部屋でカーテンごしにやるのは苦痛に堪えられないだろうと思ひました。

次はその翌月に白内障の手術です。三年前から右の方がほとんど悪くなり、本を読むのは実質上片目でした。医者に診断してもらつたら他方の目も余りよくないので思ひきつて両方やりました。ただ片目をやるのに一週間ずつで、正味二週間入院しました。今の手術は完全に器械的なもので、顕微鏡のぞきながら操作をやり、親からもらった水晶体を取り出すには、超音波で溶かして吸い出してしまふ。そしてその後にはレンズを入れるという手術で、時間は30分、全然痛くもかゆくもない。ただ、角膜にキズがついている訳ですから、

感染症が起きないように三種類ほどの目薬を、三時間おきに差します。そのため、通院でも出来ませんが、入院の方が楽でした。手術後の絶対安静は三時間位で、翌日眼帯が取れましたら、パツと明るくなってびっくりしました。他方の良い方の目と比べてみると、これまで真白だと思っていた色が実は黄色で、初めてこれが本当の白だと分かりました。

なお先程の前立腺手術の一ヶ月後、削り取ったもので細胞検査した結果、ガンのような悪性の物はなかったと言われて安心しました。

もう一ツ身辺の事で大変気になるのは、老後のことです。これから後どう考えても20年はもたない。女房が、あなたが先に行って私が病氣したら誰れが看病してくれるか、子供に迷惑をかけないとすれば、やはり介護付の住宅を考えたいといえます。八王子の近くに東京都が立派な介護付の老人ホームを作り、二、三回募集したのですがなかなか埋まらない。一番高いデラックスなのがどんどん売れて行く。そういうのは、後から聞いてみると大変資産のある人で、今の家はそのままにして、セカンドハウスぐらいのもりで買う。私達が見に行つて色々計算してみますと、入居の時に介護料を含めたものをポンと払つて、後は管理費を払う。最初の金は2DKのこじんまりしたマンションで6千万円です。それは私が持っている土地・建物を全部処分すればなんとかいけそう。入居後の管理費は年金でいけそう。しかしそれで自分の家を持つのではなく、15年間そこで病氣をしたら介

護してもらえらるといふ安心を持った借家の入居権を買う訳です。すつからかんになつて飛び込むといふ決心はなかなかつきません。

さらに、金の問題よりもはたと行きずまるのは、結婚後五十年以上の家庭生活で作つて来たがらくたの家財道具を、2DKに入るためどう処分するかといふ問題です。その処分の見通しがたたないことが、老人ホーム入居の最大の難関です。

新聞でいじめということがあちこちでやかましく言われていますが、私は文部省に永年暮した人間として、やはり学校で起きている問題に大変心を痛めます。以下に読み上げますのは、二月十七日（平成八年）に新聞を見て、私が悲憤慷慨をしたときの感想です。

(1) 新聞しばしば少年の自裁を報ず。聞く者ただ暗澹として口を閉ざす。父は遺書を公にして、学校を難じ、識者は狼狽して対策を論ず。

(2) 少年の級友は群虐のことを知らずといふ。これを知る者もあえて関与せず、少年も教師を信ぜず公訴あえてせず、一片の遺書に報復の恨みを託す。

(3) 文相、教育長、校長、相会同して、事態の收拾を論ずるも策なく、学者評論家も甲論乙駁して、かろうじて調査と相談窓口を開く。

(4) そもそも対策とは何ぞや。群虐はこれ歴然たる卑劣暴虐の所為。級友の不関与は卑怯

未練の所為、被虐に自裁するは怯懦敗北の道。

(5) 古訓にいう強きを挫き弱きを助くべしと。弱者を虐げて快を貧るは唾棄の徒。不義に屈従するは因循姑息の徒。義を見てせざるは勇無きなり。

(6) 吾人平和に耽溺して、文武両道を忘る。文はこれ事理を究めるの道。武はこれその事理を生かす心身鍛練の道。教育の対策は正に古訓に還ることなり。

この悲惨な事実を見て、世間では、首をつる前に相談を受けてなんとか思い留まらせようとか、うちの学校で誰れがやっているかを先生がアンケート調査をしたりしている。まったく対策が立たないというのは、いじめは何故起るのかという原因探及をまだ誰もやろうとしていないからです。

これは非常に難かしい問題ですが、対策を立てるには、何故こんな事が今頃急に起きてきたのかといういじめの発生の要因の分析をやる必要があります。それについて自分なりに考えたことを申し上げてご批判を得たいと思います。

私も生きてきた大正、昭和の時代の体験を振り返ってみると、やはり時代の大きな変化があり、そこに根本の原因がありはしないかと考えました。しかし、そういう古い考え方がどこまで役にたつかわかりませんので、それを一ツの仮説として考え、事実によってどれだけ裏付けが取れるかを調べる手がかりにしたいと考えました。

まず第一の仮説として、「愛情願望の閉塞」ということを考えます。今日の時代と戦前との大きな違いは、いわゆる少子化と核家族化です。三世代が同居する古い家族ではなく、しかも子供が平均1.5人という小さな家庭になってきた。その結果、世代・年齢・性の違いによる人間関係の緊密なぶつかり合いというものが希薄になってきた。そのため「対人適応能力の未熟」といわれるように、人と人との付き合いの中で、喜怒哀楽の感情をどう処理すればよいかを、体験的に訓練されていない。兄弟喧嘩でいじめられれば、必ず親は年上の方を叱って、弱い者をいたわるように躰けてきた。それが核家族の中では、兄弟喧嘩すらしたことがない子供が多い訳です。したがって、喧嘩をした時に、どれくらいぶんなくって、どれくらい痛め付けたら相手に怪我をさせるかという手加減が分からない。極端な場合には自分の感情を統御できず、相手を殺すようなことになったりする。そういう自分の生活体験の中から、知らない人と深く付き合い合ったら、どこまで自分が痛め付けられ、傷つくか分からないので、あまり深く付き合わない方がよいという「自我の閉塞状態」に陥ると思います。

ところが人間というものは、心理学者がいうように、アフエクシオン・ニーズという愛情の対象を求める本能的な要求があり、それが閉鎖されて潜在的な愛情願望になると、相手を拒否しながら、相手を自分に引きつけようという矛盾した感情になります。その結果、



相手を自分に従属させながら排除するという「いじめ」となり、ある種の充足感と快感を持つという状態になるのだと思います。

先ごろテレビで見たのですが、本当に自分が誰れからも友達になってももらえないので、ある人をいじめて、その人が絶えず自分を気にして自分と憎しみによってつながっているということが、いじめをする理由だと言っている子供がありました。この悪魔的な人間の愛情の発露が、現在の社会の中に広がって、陰湿でねばっこいいじめを作り出す心理的背景だという感じがします。それを教育的にどう克服するかというのが次の問題ですが、ここでは触れないことにします。

次に第二の仮説として、「共同体モラルの衰退」ということを考えてみます。私どもの世代から見ても非常に不思議に思いますのは、いじめというものは必ず大勢の仲間が見ているはずなんです。何故その友達が止めたり助けたりしようとしなのかということ。見て見ないふりをするという友人関係を、なんとも奇妙に感じます。先生に言っても、本気で取り組んでくれない。こういう水くさい関係を、私は共同体モラルの衰退というわけです。

戦前の確固たる価値観によって育って来た日本の学校が、敗戦によってデモクラシーという理念に向かって大きく価値観の転換をしなければならなかった。その時に先生方は、

どういふ価値観のもとに、どういふ人間社会を作つて行けばいいのかについて、充分な見通しを持つていないまま、過去にやつてきたことは、子供の個性を伸ばし、明るい世の中を作るのには良くなかつたから、全部捨てろと言われただけで、これからどうすれば良いかについては、誰も積極的に指導してくれなかつた。そのため、学校の先生方は生徒指導への自信を失い、何か指導的なことをすると、押し付けだ、個性を曲げるものだと言はれるので、当らず触わらずの方向に流れたような感じがします。

先生が一つの方向を示さなければ、生徒の間に共通の行動の規範が薄れて行きます。そういう雰囲気の中で敗戦後の義務教育を終つた子どもたちが、今の学校の先生になつていくわけです。何一つ確実な物はない。自分で思うようにやつていくしかないというような方向感覚を失なつた時代に教育を受けた人達が今の学校の先生だとすれば、自分らが経験してきた学校というものの中に、人間の行動の規範を進んで作ろうという動きが出ないのは当然かもしれません。

およそ人間社会には、人間の行動にある方向付けを与える目に見えない拘束力として、モラルというものがあります。それは、道徳とか法律とかいふはつきりした形式的のものではなく、こういうことをするのは、今この場面では良くないことだ、これをする事は良いことなんだという無言の了解の領域があり、それがモラルだと思います。それは

一種の文化的な習慣だと思っています。それは一旦壊れてしまうと、外からこれは道徳に反する、これは法律違反だと言ってみても、当事者自身がそれを感覚的に受けとめないため、言われた事が徹底しない。学校のクラスという共同体の中で、仲間に対してどういうことをやるのが恥ずかしいことか、どれがやって良いことなのかという無言のモラルが出来ていなければ、学校がどれほど校則を厳しくしても、それは実現されない。それにいらした教師が、俄然生徒に対して暴力を振うとか、厳しすぎる取締り規則が生まれてくるのは、そういうことをやらなくても、自然に安定と秩序を保つモラルというものが大きく衰退してしまったところに原因があると思います。クラスの中で友達から金をせびり、それを肉体的にもいじめているという問題を、クラスメートとして見て見ない振りをしていても別に気にならないような雰囲気。私はそのような雰囲気の存在自体が、学校としてはむしろ深刻な問題だと思っています。この共同体のモラルの形成をこれからの教育の中でどうやってゆくのが最大の問題です。

昔、三高のドイツ語で、ジットリヒカイト（道徳）とは、ジッテ（習慣）からくるんだということを知りました。つまり日常の習慣的なものの積み上げが、モラルとして形成されるのだと思います。一々言わなくとも、自然に皆の行動を規範して行くようなものを作り出すことについて、木更津高専の校長の時の経験を紹介します。

高専の寮では、一年生から五年生までが入っていて上級生が下級生をいじめたり使役したりするのが日常茶飯事でした。これを寮監がどれだけ目を光らせても、三百人もいると目が届かない。そこで私は、昔ハーバード大学の寮を見学した時に、永年寮の指導をしてこられた人から聞いた話が、非常に印象に残っていました。それは、人間というものが外からコントロールしなくても、自然に日常生活の中で自分達の平和と安定を保つようなルールを自然に作って行くのは、余り大きな集団では駄目で、三十人がマキシマムだったのです。そこで私は、文部省から予算を貰って、三百人の寮を全部三十人ずつのグループに仕切って、その中で自立した共同生活を営むことにしました。昔から寮の最大の弱点は、リビングルームがない。それが無いから、勉強部屋でしゃべって勉強の邪魔をする。寝室に入ってきて騒ぐ。そこで寝室を二段ベッドにしてスペースを作り、そこにリビングルームを作って徹底的に遊ぶ。勉強したくなったら勉強部屋に、眠くなったら寝室にと、生活のけじめをつけさせる。三十人というユニットの中には、一年生から五年生までミックスして、その仲間で自分達で一番良いと思うルールを作って学校の承認を受けて、自分たちの責任で運営する。一年に二回、校長と寮務主事が各群を廻って、どこが一番立派な共同生活をやっているかを見て、遠慮なく評価するという「群制度」に切り替えました。昨年、久しぶりに高専を訪ねて、現在まで群制度を続けて一応当初の考え方で動いている

と聞いて、大変うれしく思いました。戦後の小・中学校で、クラスというものを血の通った共同体に再構築するというのが、これから学校が直面しなければならぬ大問題だと思つていきます。

最後に、第三の仮説として「父性教育の衰退」をとりあげます。私は、子供の教育について、父親と母親の役割りはある程度機能的に分化し、価値観の体系も違ふと信じています。大げさにいえば、母親は純粹な主観の立場から徹底的に子供を肯定し、それを教化する。それに対して、父親は純粹客観の立場から厳しく訓育する。母親は宗教であり、父親は道徳だといえます。この両方があることが、子供の人間形成には非常に大事だと思ひます。特に父親の教育の象徴的なものは、歌舞伎の連獅子で親が自分の子供を千仞の谷へつき落とし、自分で這い上がる力を引き出そうとするのがあります。モンキーセンターの猿の世界の中で、子供が喧嘩をすると、母親猿は必ず自分の子供をかばうが、父親猿は自分の子供がずるいことをすれば、自分の子供の方に制裁を加える。一つの社会の中で、正義という立場から秩序のあり方を教えるのが、父親の役割です。

戦後五十年、平和で穏やかな時代が続いてきたため、また一つの生物現象として、平和な時代が続くと、オスの機能は影が薄くなる訳です。さらに経済成長と家事労働の軽減があり、女性の社会的地位が向上し、母親の権威が増大してきました。これは戦前のあまりに男

性過剰の時代に対して、むしろ当然のなりゆきだと思いますが、他面において父性的な教育理念の衰退が起きてきたように思います。

はぐくみ育てるというのは、母親の活動とつながりがあるため、学校の先生は女性化しがちです。まして小・中学校では半分以上が女の先生ですから、男の先生の影が薄くなり、父親的な立場からの訓育が無くなっていく傾向を感じます。今日、勇気とか正義という言葉がだんだん死語になりつつあるような感じがします。こんな言葉を使うと、いきなり肩をいかせて乱暴をするように誤解されがちですが、教育的とは無限に寛容で優しいことではなく、ときには本人に向かって、お前のやっていることは大間違いだ、真向から立ちふさがるといふものもなければ、教育はタガはずれてしまうのではないかと思えます。私は、文部省で学生運動が一番激しい時代に学生課長を経験した訳ですが、その時に、世代の違う大人が学生に対してやるべき役割は、俺達はこう考えて生きてきた、君達のやっていることはこの点で大間違いだ、相手の前に立ちふさがってやるのが、青年に対して最も親切な指導なんだとしみじみ感じました。君達の言う事はもつともだとか、よく分るがそんな事したら損をするとかいって、学生を指導した人は、かえって学生から信用されませんでした。

いじめられた子供がなぜ最後に首を吊るのだろうかということが、なんとも奇異に感じ

ます。首を吊る前にやる事はいくらでもあつたんではないか。ましてその父親が、自分の子供の遺書を新聞に発表したり、学校に文句を言いに行ったりするのを見ると、一番不思議に思うのは、子供が自分の命を守れるように強く育てるのは、父親の義務ではないかということ。自分の子供が首を吊るのが堪らないのなら、いじめに耐えるだけの強さを身につける訓練から始めなければいけない。学校としても、女性化した教育理念を反省し、男性的な特質を充分に発揮させるような教育プログラムを考えなければならぬかと思ひます。

(東京女学館短期大学長・元文部官僚)